

## 「タイ・チュラーロンコーン大学サマースクール参加報告書」

京都大学農学部2年 鴨田佳奈

私は、タイに行って、日本では味わうことのできないとても刺激的な2週間を過ごした。日本で、いつも通りのなんの変化もない夏休みを過ごしていたかもしれないと思うと、本当に参加してよかったと思う。タイでの大学生生活と、普段の生活や街の様子との2つの点から、このサマースクールで得たことを振り返ろうと思う。

まずは、チュラ大での大学生活についてである。驚いたのは、タイの学生の姿である。タイの学生は、勉学に対してとても積極的であった。授業中に手を挙げて質問したり、真剣にメモを取ったり、発表したり、話し合ったりと、生徒主体の授業がとても印象的であった。テストに向けて単位を取るために勉強するというよりも、自分の興味のある分野を深く掘り下げるといふ、本来大学生があるべき姿を見ることができ、とても刺激された。また、日本語専攻の生徒の日本語能力にも驚かされた。現地での私たちとの会話は、ほとんど日本語であった。私も、英語を話せるようになることはもちろん、多言語話せるようになりたいと強く思った。

タイの学生は、このように勉学に積極的であるとともに、勉学だけでなく、クラブ活動や、普段の生活もとても楽しんでいるように感じた。休み時間の様子や、放課後、通学の様子を見て、楽しんで大学に通っていることが強く伝わった。楽しみつつ、勉強も積極的に行っており、本当に理想像だと思った。私も、今しかない大学生活を楽しみつつ成長したいと思った。また、私は、今現在自分が本気でやりたいことがまだ見つかっていない。どういう将来を送りたいかを含め、自分が深く学びたいことを早く決めて、しっかりと知識を身に着けたいと強く思った。

次に、大学生活以外のタイで過ごした日々で感じたことについてである。特に印象的なことは、キラキラした光の部分と、まだ発展途上であったり、忘れてはいけないような影の部分が、共存しているということである。チュラ大がある場所は、日本でいう渋谷のようなところであり、キラキラしたショッピングモールや高層ビルが並び、キラキラした若者が集まっていた。その一方路地裏や、少し離れた町では、路上で過ごしている人がいたり、堂々と売春が行われていたり、影の部分を目の当たりにした。また、タイのパーツ危機の際に建設が中止になった建物もそのまま残されており、過去の暗い出来事を物語っていた。地方から出てきた私は、普段の生活で、都会の楽しいキラキラした部分に憧れるばかりで、影の部分から目を背けがちだったということを実感した。特に何も徳を積むようなことをしているわけでもないのに、私は特に生活に困らない環境で過ごしている一方、何も悪いことをしていないのに、生活に困っている人がいるこの世界は、とても理不尽だと思った。こんな環境の中でダラダラと過ごしている毎日を思い出して申し訳ない気持ちになった。このような恵まれた環境で日々を過ごしていることに感謝して、精いっぱい生きなくてはならないと強く思った。

この2週間をタイで過ごすことが、私の考え方や、これからの過ごし方に大きな影響を与えてくれたと思う。タイの学生からは、積極性を教えてもらった。タイの町からは、現地でしか感じるることのできない世界を感じた。様々な学部、学年から集まって一緒に行った学生からは、能動的に動くことの重要性、自分にはない考え方を得ることができた。普段の生活ではかかわることのできないコミュニティーの人たちと交流できたことは意味のあることだったと思う。さらに、普段自分が置かれているコミュニティーから離れてみて、自分にとってそこがいかに大切なところであるかも実感したので、これからより一層充実した日々を送りたい。この、タイでの2週間は私の考え方を大きく変えてくれた。この経験をしっかりと自分の生き方に生かしたいと思う。